

文楽・竹本鋳太夫さんら 優れた成果を上げた公演に賞を贈呈

関西・大阪21世紀協会と大阪府・大阪市は、芸術文化活動の奨励と普及、大阪の文化振興の機運醸成を目的に、大阪府内で上演され、優れた成果をあげた公演に対して「大阪文化祭賞」を贈呈しています。この賞は1963年に創設され、今回で57回目となりました。

関西の著名な芸術家・文化人・ジャーナリストが審査員

を務め、2020年に大阪府内で開催された公演の中から、第1部門「伝統芸能・邦舞・邦楽」、第2部門「現代演劇・大衆芸能」、第3部門「洋舞・洋楽」について、独創性・企画・内容・技法などを総合的に選考し、各賞を決定しました。各賞には副賞として、大阪文化祭賞20万円、奨励賞5万円がそれぞれ贈られました。

なお、贈呈式は、新型コロナウイルス感染症による影響を考慮し、開催されませんでした。

大阪文化祭賞 各受賞者の受賞理由

第1部門：伝統芸能・邦舞・邦楽

たけもと しころだゆう

竹本鋳太夫さん

「初春文楽公演『傾城反魂香』【土佐将監閑居の段】」の成果

2020年1月、戦前活躍した五代目竹本鋳太夫の名跡を襲名。披露狂言では、実直な吃音の絵師・又平に鋳太夫自身の誠実な人柄が相まって、観客を感動させました。人間国宝の豊竹咲太夫さんに続く世代として、文楽の芸の継承にも大きな成果をもたらすものといえます。

1969年四代竹本津太夫に入門、翌年朝日座で初舞台。1989年五代豊竹呂太夫の門下となる。文楽協会賞を2度、因協会奨励賞を5度受賞するほか受賞多数。



©国立文楽劇場

第2部門：現代演劇・大衆芸能

くどう しゅんさく

工藤俊作さん

「プロジェクト KUTO-10」の制作活動

「プロジェクトKUTO-10」は、1989年に自身が結成した演劇プロデュース集団です。その最大の魅力は、所属劇団の異なる演劇人たちが出会うこと。それによって化学反応が起き、シリアスな社会派作品からコメディまで上質な舞台が次々に生まれました。首都圏や他地域での公演も行い、大阪の若手演劇人の育成、大阪の演劇の魅力を広く発信する役割も果たしています。

1965年大阪生まれ。大阪芸術大学在学中に劇団大阪太陽族(現・劇団太陽族)に入団、17年間所属。2000年に第3回関西現代演劇俳優賞男優賞を受賞。



©クリス(500G Inc.)



©山田徳春(500G Inc.)

第3部門：洋舞・洋楽

堺シティオペラ

「第34回定期公演『アイダ』」の舞台成果

タイトル・ロールの並河寿美さんが役柄の微妙な心情を丁寧に描き出すなど、歌手の演技がいずれも高水準であるうえ、衣装や照明、舞台装置など美術面も作品の内実に迫る深みがありました。地元市民を含む総勢150名の大合唱団が登場した「凱旋」の場面など、地方都市で制作・上演されたとは思えないほどの美しさと迫力があり、オペラが音楽と美術、テキストからなる総合芸術であることが改めて示されました。

1978年創設。2010年より堺シティオペラ一般社団法人として毎年定期公演を開催。イタリアやオーストリアでも公演。2015年大阪文化祭奨励賞など受賞。



大阪文化祭賞奨励賞 各受賞者の受賞理由

第1部門：伝統芸能・邦舞・邦楽

とよたけ のぞみだゆう 豊竹希太夫さん 「錦秋文楽公演『本朝廿四孝』【景勝上使の段】」の成果

「錦秋文楽公演『本朝廿四孝』【景勝上使の段】」における豊竹希太夫さんの浄瑠璃は、声がよく伸びて安定感があり、人物をよく把握して、語り分けにもめりはりがありました。今年度は新型コロナウイルス感染症対策による厳しい状況で、公演も激減しましたが、その中での進境には著しいものがあり、今後のさらなる活躍が期待されます。

2002年文楽研修生を経て2004年豊竹英太夫（現・六代呂太夫）に入門、同年国立文楽劇場で初舞台。第39回（令和元年度）国立劇場文楽賞文楽奨励賞など受賞。



©国立文楽劇場

第2部門：現代演劇・大衆芸能

沢村さくらさん 「沢村さくら二十周年記念曲師の会」の成果

浪曲の曲師、沢村さくらさんが、入門二十周年記念の「曲師の会」を開催しました。さくらさんは東京で入門し、2005年以降は大阪で活動。この会では東西の浪曲師の三味線をつとめて関東節、関西節を見事に弾き分け、曲弾きや解説も交えて浪曲の魅力を存分に伝えました。巧みな技や企画力に加え、曲師の存在の重要性を示したことも合わせて評価されました。

山形県出身。2000年に沢村豊子に入門、同年浅草木馬亭で初舞台。2018年より「浪曲三味線ワークショップ」を主宰。第18回（2021年）上方の舞台裏方大賞受賞。



©小林正明

はしもと ただし 橋本匡市さん オンライン配信を活用した演劇公演の企画上演

コロナ禍により多くの演劇公演が中止・延期を余儀なくされる中、企画主任を務める小劇場・ウイングフィールドでいち早く5月に配信プラットフォームを開設。この「仮想劇場」を用いた短編演劇祭も企画しました。表現の場を守ると共に、若手と映像系クリエイターを結ぶなど、出会いの機会も創出。劇場の在り方を模索しました。

近畿大学文芸学部芸術学科卒業。劇団「尼崎ロマンポルノ」、演劇ユニット「万博設計」で作・演出を担当。「若手演出家コンクール2019」優秀賞など受賞。



©井上信六

第3部門：洋舞・洋楽

たまき 環バレエ団 「オータム・バレエ・コンサート」の成果

1964年に団を創設し、2019年大晦日に逝去した環佐希子さんによるモダンバレエ5作品を上演。追悼・顕彰にとどまらず、その時代を超える魅力を余すところなく見せました。他にサイトウマコトさんによるエネルギー溢れる群舞と奇抜な発想が哀切を誘うコンテンポラリー作品、「くるみ割り人形」と、幅広い対応力を実証するレベルの高い公演でした。

環佐希子さんは11歳でバレエを始め、1963年にパリへ留学。団創設後はメルパルクホールなどで毎年公演を開催。奈良、神戸など関西一円に支部教室を持つ。



©古都栄二（テス大阪）

あいた みずき 會田瑞樹さん 「ヴィブラフォンソロリサイタル in OSAKA」の成果

関西の作曲家の新曲を集めた公演において、優れた企画力、確かなテクニックで魅了しました。相撲を音楽にした「相撲ノオト」など、ユーモラスな曲を披露し、楽譜も展示。作曲家らが会場で解説も行い、敬遠されがちな現代曲の数々を親しみやすく紹介することに成功しました。今後さらに充実した活動が期待されます。

2010年日本現代音楽協会・朝日新聞社主催「競楽IX」第2位入賞と同時にデビュー。これまでに300作品以上の新作初演を手がける。令和元年第10回JFC作曲賞入選。

